ある。１つは、「一マロ」が、「枚数」ではなく「高さ」であらわされていることである。テヅキで切る厚さが２～３寸であることが示されているが、単純に高さに換算することはできない。なぜなら、サルケは乾燥するとかなり収縮するからだ。「厚さ二～三寸にとる」という記述は、文脈から乾燥前の採取時の厚みだと考えられる。いまひとつは、テヅキで切ったものを、更にタヂで「細かく裁断」したというが、何分の一に裁断するのかが示されていないことである。「裁断したサルケを二枚ずつ並べ」とあるが、そもそも裁断したサルケのサイズや分割数が不明である。具体的で非常に貴重な記録だが、比較するデータとしては用いることができない。

(8)保管

自宅近くの小屋に保管したり（柴田①②⑤、丸山⑳、出来島㉓）、自宅裏手の屋敷地内にノマをかけて積んだりした（柴田③）。後者は、津軽地方で「サルケニオ」と呼ばれる（写真）。柴田の大正13年生まれの話者が最後にサラケを採取したのは昭和30年代前半だった。ノマをかけて保管していたサラケの現物を見せてやろうと、私をその場所まで案内してくれたのであるが、長年野ざらしに近い状態にあったため、いまは朽ち果てて跡形もなくなっていた。話者は現実にそれを目にするまで、父親と積んだ最後のサラケが、その時のすがたをいまも留めていると考えて疑わなかった。半ば放置していたとはいえ、捨ててしまうには惜しいものだった（柴田③）。柴田の昭和９年生まれの男性も、５～６年前まで、60年ほど前に採取したサルケを捨てるに捨てられず保管していたという（柴田④）。これらの事例は、捨てる場所がないというより、苦労して採取したものだから惜しいという気持ちがあってのことではないだろうか。同様の事例は、旧稲垣村（つがる市）にも見られる。いまも、50年近く前に採取したサルケが、倉庫の二階に山のように積まれているのである。

サルケニオ（昭和33年夏）
佐々木直亮氏撮影

(9)用途

A,燃料

サルケの用途のひとつは、燃料である。

Ａ－１暖房（採暖）　囲炉（ロブヅ／ロブヂ／ロバタ／シボド／イロリ）やストーブで、採暖（暖房）のために利用された。コタツやヒバチなどの採暖具に使用したという事例は、今回はみられなかった。

・時代差

サルケを採暖（暖房）に用いた当時の設備は、囲炉が26件中14件（柴田①③④⑤⑥⑦、菊川⑨⑩、丸山⑫⑰⑳、出来島㉑㉓、大畑㉕）と多くを占めた。ほかに、話者が出身地等の話として語ったところによると、菰槌（木造）、豊川（稲垣）でも同様であったという。昭和20年代に入りストーブを導入した家庭では、ストーブの燃料としてサルケが用いられた（柴田④、丸山⑫）。その後、徐々にマキ（タキギ、ワッチャギ）が用いられるようになったようだ。ほぼすべての話者が、囲炉でサルケを暖房に用いていたと回答した柴田地区で、ストーブの燃料としてマキが用いられていたと唯一語るのは、昭和25年生まれの女性であった（柴田⑧）。話者が子どものころ、すなわち昭和30年代前半にマキを用いていた家庭があったという事例である。また、昭和30・31年に、それぞれ丸山に嫁いだ二人の女性（丸山⑰・丸山⑭）は、婚姻時、嫁ぎ先でストーブが使用され、その燃料はマキであったと語る。これらの証言を総合すれば、昭和20年ころまでは囲炉でサルケを用いることが一般的で、20年代に入ると徐々にストーブが導入され、サルケとともにマキも用いられるようになり、昭和30年代に入るとストーブでマキを焚く家庭が一般的になってきたというところだろうか。菊川の昭和７年生まれの男性はこのあたりの事情について、「サルケを主に利用する時代から、サルケとマキを併用する時代となり、併用するマキの割合が徐々に多くなっていった」と語る（菊川⑨）。

・地域差

今回、聞き取りをおこなった地域は、柴田・菊川が内陸部に位置し、丸山・出来島は比較的沿岸に近い集落である。個別の事情を無視して一般化することはできないが、集落総出で村山の木伐りをおこなったり、海岸の寄り木（流木）を利用したりすることができた丸山・出来島地区は、柴田・菊川地区に比べて、比較的早くマキの利用が広まったのではないかと考えられる。出来島地区の、昭和４年生まれの女性は、昭和21年にストーブを導入し、燃料としてマキや流木を使用したというし（出来島㉔）、大正13年生まれの男性は、昭和20年代終わりまで、着火の際に流木を利用していたという（出来島㉑）。

嫁ぎ先に来て初めてサルケの存在を知ったという事例もある。越水（木造）出身の昭和10年生まれの女性は、昭和29年に柴田へ嫁ぎ、サルケの存在を知った（柴田⑦）。出身地の越水は「山ドコ」（山がちの場所、山に近い場所）

なので、柴を利用していたという。館岡（木造）出身の昭和12年生まれの女性は、大畑に嫁いでからサルケを知った（大畑㉖）。越水や館岡は、いずれも山林に比較的近い場所に位置している。

Ａ－2炊事

サルケの燃料としての用途のひとつに炊事がある。柴田①②③④⑧、菊川⑨⑩、丸山⑫⑭⑰、出来島㉑の事例では、飯炊きにサルケを利用したことを確認した。これらの11事例のうち、３事例ではサルケとともにワラなどの補助燃料を利用していた。上北地方では、単独で使用するよりは木材と併用する場合のほうが多く、また併用するにしても使用者の意識のなかで泥炭は補助的な位置づけにあった（拙稿2017,P.151）のに対し、津軽地方ではサルケが主要な燃料で、ワラなどの他の燃料が補助的な位置づけにあった。この意識の差は、木材などの他の燃料を入手することが比較的容易であった上北地方の低地集落と、困難であった津軽地方の低地集落との地理的環境的要因によるものと考えられる。

飯炊き以外には、魚を焼く（柴田①、出来島㉑）、握り飯を焼く（柴田④）、餅をあぶる（柴田①）、湯をわかす（柴田③）、保温する（丸山⑳）などの使用例があった。加熱と保温での燃料の使い分けもおこなわれた。加熱には松や杉の葉を用い、保温にはサルケを用いたという（丸山⑳）。餅は灰に埋めて炙ったので、ジャリジャリという食感だったという（柴田①）。

・囲炉

飯炊きの設備として最も一般的であったものは、囲炉（ロブヅ、シボド、イロリ）である。囲炉での炊事には、カギノハナ（柴田①②丸山⑫⑳）とツルナベ（柴田①②丸山⑫⑰⑳出来島㉑）が道具として用いられる場合が多い。ナベは混炊や粥といった、米の節約を意図した炊飯方法に適している。この方法では、炊き干し法のように強い火力を必要としない。サルケの燃えかたの特徴である穏やかで持続性のある火が、吹きこぼれもなくむしろ適している。「炊飯の際には、サラケを増量して火力を増強した」（柴田③）「山盛りにして火力をあげて炊飯した」（菊川⑨）などの証言もあるが、炊き干しにこだわらなければ、強い火力は必要でない。「サルケでは飯は炊けない」という認識は、改良カマドの普及に伴って中央から移入された新しい知識ではないだろうか。丸山の昭和11年生まれの男性は、「ナベ炊きのご飯のほうが、デンキガマよりも美味しかった」と語る（丸山⑳）。

・マキストーブ

飯炊きの設備として、囲炉にかわって用いられた代表的なものは、マキストーブである。今回の調査では、柴田④丸山⑫⑭の事例でマキストーブを飯炊きに用いたという証言を得た。更に、その燃料としてサルケを用いたというものが２例あった。青森県内で、囲炉を閉じたあとにマキストーブを設置し、暖房と炊事を兼ねたという例は一般的である[64]。煙道（煙突）により屋外に煙を排出するという機能は、改良かまどの要素のひとつであることを考えると、マキストーブは本県において改良かまどを代替する役割を担っていたと捉えることができる。マキストーブは価格が低廉で設置が容易であり、かまどのように炊事に特化せず暖房と兼用できるなど、さまざまな利点があった。

・改良カマド

飯炊きの設備としては、上記が主流であったが、柴田②⑧の事例では、改良かまども用いられた。カマドと組み合わせられた被加熱具はハガマ（ツバガマ）で、燃料はマキやワラであった。カマドの燃料としてサルケを利用したという事例はみられなかった。

・コンロ（焜炉）やシチリン（七輪）、ゴトクなどを用いた炊飯　今回の事例のなかにはなかった。

付）燃料の変遷にともなう飯炊きの設備と道具の変化について（表3）

地域	№.	～昭和20年代　　昭和30年代～
柴田	①	ロブツ[サルケ]+ナベ
柴田	②	ロブツ[サルケ→柴・ワラ束]+ナベ　→レンガカマド[柴・ワラ束]+ツバガマ　→デンキガマ(S39)
柴田	③	シボド[サラケ+補助燃料]
柴田	④	シボド[ワラ+サラケ]　→ストーブ[サラケ?]
柴田	⑤	△ロブヂ[サラケ]
柴田	⑦	△ロブヂ[サラケ]
柴田	⑧	→カマド[マキ]+ツバガマ　→デンキガマ[電気](S35)
菊川	⑨	シボド[サシ・サラケ]
菊川	⑩	シボド[サラケ]
丸山	⑫	ロブヂ[サラケ]+ナベ　→ストーブ(S25)[サラケ→マキ]
丸山	⑭	ロ[マキ](S31-32)　→ストーブ[マキ]+ツバガマ　→保温なしデンキガマ(S36)
丸山※	⑭	ロ[サラケ](S31)
丸山	⑰	シボド[サラケ]+ナベ
丸山	⑳	イロリ[枯葉]+ナベ
出来島	㉑	ロ[サラケ]+ナベ
出来島	㉓	ロブヂ[不明]　→ガスガマ[ガス]　→デンキガマ[電気]
大畑	㉕	シボド[カポシ・杉葉・ワラ]　→ガスガマ[ガス]　→デンキガマ[電気]

表記法：設備[燃料]+非加熱具（使用年代）　△は炊事への言及なし

A－3　風呂

出来島では、風呂の燃料としてサルケが用いられた。大正13年生まれの男性（出来島㉑）によると、自宅に風呂がなかったので隣家に風呂を貰いに行ったが、その燃料はサルケであったという。隣家の風呂はいわゆる五右衛門風呂であった。「私が子どものころは、風呂がなかったので、隣の家でお風呂をたてるときにオケで水を運んで、焚き物としてサルケを持って行って、その家の家族が入ってしまったあとで、私たちの家の家族が入らせてもらいました」と語る。入浴させてもらうみかえりに、水とサルケを提供したというのである。

筆者が以前聞き取りをおこなった秋田県横手地方では、「ネッコ（泥炭）で風呂をわかすと、よく温まる」という声を聞いた。北海道の石狩湿原や南浜湿原（利尻）では、泥炭地の水でわかした風呂は湯冷めしないと言われているという[65)]

B,燃料以外

泥炭の用途は多様である。世界的には、麦芽の乾燥、敷きわら、泥炭紙、泥炭ろうそく、皮なめし、窯業、アルコールの抽出、充填剤、浄化剤、脱臭剤、建築材料、保水剤、泥炭浴などの用途が知られる[66)]。アルコールの抽出については、明治41年の地元紙『東奥日報』に報じられている。「泥炭の研究」と題し、西津軽郡では泥炭地を耕作しながら泥炭を燃料として用いていることを紹介したうえで、たとえばドイツでは泥炭からアルコールを精製するなど、ヨーロッパ諸国では泥炭に関する研究が非常に進歩していると述べている。すなわち、資源の多面的な有効活用の可能性を報じたもので、目下札幌農科大学（東北帝国大学農科大学）で青森県産の泥炭について研究中であると報じている[67)]。北海道は明治時代からこの方面の先進地であったが、農業用資材としてはもちろんのこと、ろうそく、皮膚病薬、蚊取線香、漆喰原料、油吸着マットなどへの活用も試みられたという。[68)]

今回の調査では、燃料以外の用途として、融雪（柴田②）とワラビのあく抜き（出来島㉑）に利用したという証言を得た。

(10)火の操作

A,着火

わずかな木（マキ、流木を１～３本）やワラ、スギッパなどの上にサルケをのせて着火するという事例が多い（柴田①②③④⑤⑦、丸山⑰、出来島㉑㉔、大畑㉕）。マキは、海岸に近い出来島では流木を利用し（出来島㉑）、柴田では鰺ヶ沢方面の行商から買ったという（柴田⑤）。火種としては硫黄のついたトツケギ（ツケギ）が用いられた（柴田①②）。トツケギは１㎝程度の幅に割って使用した（柴田②）。

着火の際には、サルケはそのままのサイズではなく、小さく割ったものを用いる事例が多い（柴田②③④⑤、丸山⑲［菰槌での事例］、出来島㉔、大畑㉕）。小割りにしたものを、ハの字に立てるという事例もある（出来島㉔）。これらは、火のつきを良くするための工夫であると思われる。小割りにするには、ナタが用いられた（柴田③⑤）。割る際には、サルケの「目」を意識した。柴田の大正14年生まれの男性（柴田③）は、「サルケには目があってね。こう割ればいいけれども、逆にするとあまりよくないんだよね」と語る。同じく柴田の昭和９年生まれの男性（柴田⑤）も、「サルケにも全部、縦横があるんですよ。マキも同じでしょう。横から割る気になっても割れないでしょう。サルケも、マキの目と同じで、横から割る気になっても割れないんだ。サルケの目の方向に割ると割れるけれど、横に割ろうとしても、粉々になって割れないんだよ」と語る。つまり、サルケには木材と同様、縦には割れやすく横には割れにくい性質があり、木目のようにサルケにも目があるというのである。植物の遺体が堆積する際に、水平方向に倒れた状態で積み重なることに由来するものと思われる。つまり水平方向がサルケの「目」の方向である。サルケは縦方向と横方向で透水性が異なる[69)]ことも、この「目」の方向性と関係があるのではないかと考えられる。

サルケの質と着火の難易は関連があった。良いサルケは火がつきやすいが、悪いサルケはつきにくく、火持ちも悪かったという（柴田④）。柴田産のサルケは良質なので、簡単に火がついたという（柴田①②）。

B,維持

サルケは一度火がつくと消えにくい性質のものであった。柴田の昭和10年生まれの男性（柴田②）は、「ひところ屏風山のほうの原野で火事があったでしょう。消えたと思ったらまた燃えて来たそうだよ」と、過去に何度かあった原野火災を引き合いに出して、サルケの火持ちのよさを説明した。その火持ちの良さが、サルケの燃料としての魅力のひとつであった。一定の火力を維持するためには、熾になったサルケの上に順次サルケを継ぎ足した（柴田③、丸山⑫）。小割りすると火持ちが悪いので、そのままのサイズでくべる（丸山⑫）という方法もあった。

目的によってサルケを増量し、火力をあげた。具体的には飯炊きの際（柴田③、菊川⑨）である。サルケの質によって、火力も異なったっらしく、田ザラケ（田の下から産出するサルケ）が火力が強いと語る人もいる（菊川⑨）。加熱には松や杉を用い、保温にはサルケを使う、といったように燃料の使い分けの工夫もおこなわれた（丸山⑳）。

訪問客をもてなすために、サルケを多くくべることもおこなわれた（柴田③）。かつて、柴田には「弘法のサルケ」という伝説が語り伝えられていた。貧しい身なりの老人（実は弘法大師）が一夜の宿を乞い、乏しい焚き物を使ってあたたかくもてなしたお礼に、サルケの存在を教えられ、その後は焚き物に困らなくなった、というものである[70]。

火持ちの良さは、就寝時の採暖にも役立った。寝る前にサラケに灰を被せておくと、朝まで火を保つことができたという（丸山⑫）。また、サルケ２～３枚あれば一晩持ったと語る人もいる（丸山⑰）。

C,始末

サルケの消火について、今回の聞き取りのなかで言及する人はいなかった。

(11)副産物

A. 煙

聞き取りでは、煙が大量に出たという証言が多数聞かれた（柴田①②③④、菊川⑨、菊川⑩、丸山⑬⑰⑲⑳、出来島㉑㉓㉔、大畑㉕㉖）。そして、特に煙が激しいのは着火してまもない頃であった（柴田①④、出来島㉑）。

家の中は煙で見通しが効かなかった。「サルケを焚いている家を訪ねると、ヨコザに座っている主人の顔が見えなかった。よくそんな中で暮らしたものだと、今になって思う」（菊川⑨）、「暖かいが煙がひどく、周りが見えないほどだった」（大畑㉕）という。『津軽口碑集』（昭和４年）には、同様の情景が次のように描かれている。「家の入口には雪障けを造り、鴨居よりは懸け筵を下げたり。之を潜れば厩にいたり、折れて進めば居室に入る。床は唯板を張れるのみ。客訪へば畳み置きたる莫蓙を展べて薦む。炉には泥炭を焚く。黒煙濛々たり。咽びて頭を挙ぐべからず。炉の大きさは畳程あり。草鞋（わらじ）ばきの足を暖むるに便なり。其上には火棚ありて、時に湿れたる藁靴を見たりき。寝るには藁を敷て布を覆ひ、枕には長き砧状の木片を置きたり。」鴨居に懸け筵を下げていることなどから、貧しい暮らしぶりが窺われる。黒煙がもうもうと充満し、訪問した著者は咳が止まらなかったという。[71]。

ひどい煙のために目が痛み、涙が出て眠れなかったという人も多い。昭和５年生まれの大畑の女性は、「目が痛くて、寝られなくなってしまうんだ。暖かいのは暖かかったけれど、煙たくて」と語る（大畑㉕）。また同じ地区に暮らす館岡出身の昭和12年生まれの女性は、自家ではサルケを焚いていなかったが、「子どものころ、（サルケを焚いている）他の家に泊まると、涙が出て寝られなかった」と語る（大畑㉖）。丸山に住む昭和10年生まれの女性は、出身地の出精集落での経験として「何年生くらいかなあ、サルケを焚くと目に染みて、目が痛くてね。（情感を込めて）寝られないんだ。それでも、暖かいのは暖かかったんです」と語る（丸山⑲）。苦痛と引き替えの、暖かさであった。

この、目の痛みが眼病の原因になったと考えている人は多い（柴田③④、丸山⑲⑳、大畑㉕）。たとえば、「煙が多く、目が痛い。メクサレになる人が多かった」（丸山⑲［菰槌での経験］）、「煙が原因でメクサレになった」（丸山⑳）という証言である。メクサレとは、眼病全般を指すことばである。なかでもサルケの煙が「トラホーム」（トラコーマ）の原因になったと考えている人は、今回の調査（柴田②③）を含めて多い。煙が目に染みてつらく、しばしば汚い手で目をこするため感染し、症状も悪化したのだろう。往時の月刊誌は「本県トラコーマは燃料にも関係する」と題し、サルケに言及している。「一体トラコーマは都会よりも村落に多いのは事実であります、之はもともと其清潔の如何に関係を有するのは当然でありますが、村落の燃料は主として木材又はサルケの如きものを用いるので其煙は眼の毒となつて結膜炎を起しますし結膜炎に侵された場合は容易にトラコーマ病毒に感染するの機会を作るからであります」[72]。また、昭和17年に県内のとある農村でおこなわれた目の疾患と暖房設備との関係についての調査によれば、囲炉では75.2%、ストーブでは24.8%に眼病がみられたといい、囲炉と眼病との因果関係が指摘されている[73]。

ひどい煙を逆手にとったほほえましいエピソードもある。柴田の昭和10年生まれの男性は、濁酒の摘発を逃れるためにサルケを利用したという（柴田②）。「昔は、酒を買うお金がなかったので濁酒をつくったものです。ワラを被せて隠しておくのですが、税務署の職員が調べに来ると、わざとサルケを多めに焚いて煙をたてました。『なんて煙たいんだ』と我慢できず、職員は家にあがることもなく退散してしまいましたよ。（私たちは）うまくいったなあって（喜んで）。昔はそれ（濁酒）くらいしか楽しみがないんですから（笑）」。

摘発を逃れるためにサルケを利用したという話は、ほかにもある。戦後まもないころ、サルケの中に闇米を隠して運搬し、七里長浜で取引をしたというのである。闇米６俵ほどを積んだ上に泥炭を積み重ね、荷車で運んだという[74]。

B. スス

大量に出る煙は、大量の煤をもたらした。家の中の柱や壁は煤でまっ黒になった（柴田①、丸山⑬［出精での経験］）。梅雨どきになると、湿気のしずくが黒い水滴となって落ちてきた（柴田①⑤、丸山⑬、出来島㉕）。「高校生のころ、真っ白なワイシャツが黄ばんでしまった」（柴田①）、「着物に付着した」（出来島㉕）、「予防のために、天井にカヤやワラの菰を置いた」（柴田⑤）などの証言が聞かれた。数年前の聞き取りでは、この煤を膏薬に利用したという話を聞いた[75]。泥炭には殺菌効果があるとされ、第二次大戦中には外傷用にミズゴケ泥炭のガーゼが用いられたという[76]。この膏薬にも泥炭ならではの薬効があったのだろうか。

C. 臭気

サルケには独特のにおいがあった（柴田①②③④、菊川⑨、丸山⑩⑬⑰⑳、出来島㉑㉔、大畑㉕）。そのにおいを、「土臭い」（柴田④）、「スス臭い」（出来島㉕）と土地の人は表現する。サルケによる独特のニオイのことを「サルケカマリ」と言う人もいる。（柴田②、菊川⑨）。

柴田の昭和19年生まれの男性は、親戚の住む鰺ヶ沢の山村を訪ねたとき、「あなたたちが来るとサルケくさい」と言われた（柴田①）。柴田の昭和10年生まれの男性は「こちらから行くとサルケカマリ、山から来ると木のニオイががする」のだという。同様の話は、旧稲垣村にもある。「金木の中学へ通っていた頃、岩木川右岸、山つきの生徒達から川向う（左岸）の生徒はサルケ臭いと言われた。それに対して、山つきの生徒はヒバの匂いがするとも言われた」[77]。出来島に住む昭和４年生まれの女性は、丸山や出来島の集落に入ると、町から来た人たちが「サラケくさい」と言ったという話を聞いた。それは、サルケを利用している人々が多く住む村に対する、町の人のイメージでもあった。柴田の大正14年生まれの男性によると、あるとき、永田集落の人が町の商店から品物を購入したが、不良品だったので返品しに行った。すると、一度家に持って帰ったものならサルケ臭くなっているからと断られた。その人の家では実際にはサルケを焚いていなかったのだが、そのような言いがかりを受けたという。

サルケのにおいは、生活そのもののにおいだったので、焚いている人にとっては当たり前のものだった。「当たり前だから苦にならなかった（丸山⑰）、「ニオイがあるのはどの家も同じ。気にならなかった」（丸山⑩[菰槌での経験]）と語る。菊川に住む昭和７年生まれの男性は、北海道にいる長姉の夫が家を訪ねて来たとき、「サルケカマリ（ニオイ）がするなあ」と言われた。「ニオイなんかしないでしょう」と反論したが、実際に自分がサルケを焚かなくなってから、焚いている家を訪ねたときに、ニオイを感じたことで、姉の夫が言ったことが本当なのだと分かったという（菊川⑨）。

D. 灰

サルケから出る大量の灰も、有効に活用された。春先に雪上に撒き、融雪を促した（柴田②）。また、ワラビのあく抜きにも利用した（出来島㉑）。

(12) その他（周辺事象）

採掘跡（キリッパ）　湿原や、ため池の底などからサルケを採掘したあとの窪地をキリッパ（柴田②③、丸山⑯）、あるいはキリパ（柴田①、丸山⑫）、ソゴナシヌマ（柴田⑧）などと呼んだ。

・キリッパでの遊び　キリッパは水遊びや釣りなど、子どもたちの遊び場にもなった。「キリッパで釣りや水遊びをした。キリッパの水はサルケが腐ったような赤い水だった」（柴田②）、「サルケを掘った場所はソゴナシヌマと呼び、子ども達の遊び場だった」（柴田⑧）、「キリッパがいたるところにあり、大小の雑魚がいた。遊びを兼ねた魚釣りの場だった」（丸山⑯）、「サラケを切る場所が子どもたちの遊び場だった」（丸山⑳）という。

湿原や沼、ため池などには、大人の身長ほどの深さのあるキリッパもあった。丸山の昭和13年生まれの男性は、小学生のとき、キリッパに落ちて死にかけた。「サルケを切ったところが深くなっていて、水が溜まると（水面下になり）わからなくなってしまうので、足を落として死ぬところをしました。『キリパ』と言って、まわりは普通なのでそのつもりで走って行ってズボンと（落ちて）。死ぬところをしました。水の中で目から星のようなものがビンビンと出ました。たまたま隣家の中学校３年生くらいの女子が居合わせて、当時私は小学生だったんですが、助けられて。私は気を失ったままでしたよ。何十年も前の話ですけどね」（柴田⑫）。筆者の過去の聞き取りによると、森田村（つがる市）のため池で、キリッパで遊んでいた子どもが溺死したという事例がある[78]。

・キリッパの魚　キリッパでの釣りは、遊びを兼ねた食糧確保の方法でもあった。柴田の昭和19年生まれの男性によると、キリッパの魚を焼いて食べたという。ただし、焼き魚にするのは比較的大きなサイズのもので、小魚は食ずに焼いて出汁にしたという。『キリパから獲れる小魚は食えない』とされ、骨が硬くて丸ごと食べるのに向かないからではないかという（柴田①）。同じく柴田の昭和10年生まれの男性も、キリッパから網でフナをすくい上げた。キリッパの水は「サルケの腐ったような赤水」で、そこから獲れるフナも赤く染まっていたという。串に刺して焼いてそのまま食べるほか、乾燥させて出汁をとったという。『岩木川流域の民俗』（2008）には同様の事例が報告されている。下牛潟や富萢では、焼いてからワラで編んで干し、おつゆなどのダシにしたという。焼干しはダシが出るし実にもなったという。[79]

「フナズシ」をこしらえる人もいた。「フナズシを作りました。とてもおいしいものです。上手な人がいるんです。全然臭みがなくて、キリッパには30㎝くらいの大きなフナがたくさんいて」（柴田②）。柴田の昭和19年生まれの男性は、もう少し小さめのフナズシを弁当に持って行って食べた記憶がある。まったく生臭みがなかったという（柴田①）。『岩木川流域の民俗』（前出）には、近隣地域でのフナズシの作り方が紹介されている。「五月ころにフナが多くとれるとすしにした。作り方は、まずフナの頭や内蔵を取り除いて塩漬けにし、秋の虫がわかないころまでおいて

おく。そして塩出しをしてから少し酢に浸し、もち米の飯（人によってはうる米の飯）・千切りのニンジン・ショウガ・ナンバンを加えて漬けた（大巻）。ナガジャッコと混ぜてすしにした。頭・尾・内臓はあらかじめ取り除いた（車力・下車力）」[80]

盗掘　原野やため池、ヌマなどには、採掘権が設定されていたが、無断でサルケを採掘する人もいた。出来島の大正13年生まれの男性は「盗み癖のある人だと、他所の人が知らないうちに、１段分だけを盗掘する人がいてね。ばれた人もいますよ。その場合には仲裁を入れて、いくらかの弁償をして、謝罪して、二度としないと誓わせました」と語る。出来島では７段ほどの深さに掘ったというから、１段だけ掘っても目立たないと目論んだのだろうか。サルケの採取や乾燥は、自宅から離れた場所でおこなわれるため、盗難盗掘はつきものであったのではないかと思われる。サルケを二度と盗まないことを誓約し、再犯した場合の代償について取り決めた明治時代の一筆書きが、津軽地方の個人宅に保管されている。

俗信　柴田のＢ氏は、サルケに富む地盤が地震の揺れを抑えると考えている。同様の考えを持つ人は上北地方にもみられる[81]。木造永田では、田打ちが終わるとサルケを採って来て燃やし、その火にあたるとその後の仕事がうまくいくといわれていたという（『こまおどり』）[82]。サルケの強烈な煙が、目を患う要因になったと考える人が多い。眼病平癒を願う信仰にもつながった。

知識　「サルケには目がある」（柴田③⑤）という知識は、泥炭の異方性についての知識である。「この辺りはサルケがチェ（強い）」（菊川⑪）「サラケがチケェ（近い）」（柴田②）という認識は、場所により層厚が異なることについての知識にもとづく。降雨を気にせず「テンキボシ」（露天干し）（菊川⑨）する理由は、泥炭の乾燥にともなう難可逆性・不可逆性についての知識に関わる。「田ザラケ」（菊川⑨）「ヤチザラケ」（菊川⑨）「ヤシギサルケ」（柴田②）などの質的分類は、構成植物の違いや、田地での排水履歴の有無が泥炭の質的変化をもたらすことについての知識に関連している。「田ザラケ」がカタズミ（堅炭）のように締まって良質であるという認識（菊川⑨）は、排水によって（間隙比と透水係数が小さくなり）強度が増す事実に関連する。庶民はこのような知識を経験的に獲得し、理に適った方法でサルケを利用していた。その経験と知識は、世代を超えて共有されてきた。

5. 結論

(1)採取の主体、方法

家族や仲間同士で採取をおこなうことが多かった。採取の工程は、サルケを切り取る作業、切り取ったものを受け取る作業、移動させる作業、置く作業からなる。サルケを切る作業は男性中心であったが、受け取る、移動させる、置くといった作業には女性や子どもの参加があった。ところが本県で刊行されている自治体史の多くは、切る作業だけに注目し、男性を主体として描いている。実際のところサルケの採取は、切る作業だけではなく、上述のような一連の工程を含めて成り立っている。そこには女性や子どもを含めた家族や仲間との協働があったということに留意したい。さらに、積み重ねる、ひっくり返す、運搬するなどの作業には、より積極的な女性や子どもの関与があった。

木造柴田では、長短２種類のスキを用い、更に特殊なカマで整形する作業をおこなっていた。集落内では複数の者から同様の採取法について聞いたが、他の集落に類似の事例がない。つまり柴田という地域独特の慣習である可能性が高い。道具の使用法の珍しさとともに、特徴のあるつくりの「カマ」は資料として貴重である。採取法・用具ともにこれまで報告されていない。稿をあらためて報告したい。[4(5)DE,(6),(7)]

(2)利用の多様性

従来の調査報告は、サルケを ①「暖房のために」②「冬に用いられる」③「燃料である」と説明するものが多い[83]。このような説明は、誤解を生じさせる可能性がある。第一に、サルケの用途は暖房や採暖に限らない。その多様性については本稿を始め、拙稿（2015、2016、2017）で触れた。第二に、サルケは冬期に限って用いられるものではない。飯炊きをはじめとする調理や風呂焚きなどの燃料として、一年を通じて用いられる。飯炊きの用途に言及している資料は、管見では『新撰陸奥国誌』（1876）だけである[84]。第三に、サルケの用途は燃料に限らない。軒下に積むことによって保温効果を高めたり、灰は融雪や灰肥、あく抜きに用いられた。[4.(5)A,(9),(11)]

(3)利用の動機

津軽地方においてサルケの利用が特に盛んだった地域は、主として岩木川下流域の平野部であったとされる。しかし前回（2015）の調査結果と併せて考えると、使用されていた範囲は予想以上に広く、村山や持ち山の木や柴を利用できる地域や、リンゴの選定枝や流木を利用できる地域であっても、程度に強弱はあれ、サルケを使用する場合があることがわかる[85]。また、岩木川下流域の平野部では水稲や大豆の栽培がさかんであり、稲ワラやマメガラなど、

火持ちはよくないが強い火力を生み出すことができる燃料に恵まれていながら、飯炊きにサルケを利用する事例もみられた。使用されていた時代についても、予想以上に近年まで利用されており、薪や油の入手が往時よりも比較的容易になった昭和40年代においてすら、未だストーブの燃料として利用していたという例があった[86)]。そして話者のかたり口からは、焚き物がないから仕方なく利用するという消極的な意識ではなく、サルケという都合のよいものが近くにあるから利用するという積極性が感じられる。山へ行って柴や杉葉を拾ったり、共同で木伐りをおこない薪を分配したり、薪売りから購入したりしなくても、足下に「宝の山」があるのである。「弘法大師のありがたい焚き物」という伝説が伝えられているのは、まさにサルケに対するそういった心意をあらわしているのではないだろうか。そのような意味で、泥炭（サルケ）が他の燃料に劣るものであり、燃料の不足を補うための、「代用品」であるとするとらえ方は、そこに暮らすひとびとの意識を必ずしも反映したものでないことに注意したい。[4.(2),(4),(5)A]

(4)売買と譲渡

本稿の冒頭で述べたように、自家消費の枠を超えた利用についての情報は非常にすくない。これを探ることは、今回の聞き取りの目的のひとつであった。具体的で詳細な証言は１事例に過ぎないが、サルケの商品価値や流通についての貴重なデータを得ることができた。目下のデータによれば、価格は品質にもよるが一冬分が１～1.5俵程度（運賃は0.5俵）であり、流通域は西北津軽郡と五所川原である。県外への移出が目論まれた時代もあった。更に聞き取りをかさね、人とものの動きを捉えたい。[4.(4)]

(5)周辺事象

サルケの利用に付随して、間接的にさまざまなできごとが生じる。拙稿(2015)および、本稿の４(考察）をはじめ、２(記録)の随所で詳細について触れた。以下に要点のみ記す。

①耕地の改良　　サルケの採掘にともなう客土により耕土の改良がおこなわれた。また、田面を低くすることが灌漑不良の改善につながる場合もあった。表層のサルケを焼くことで、施肥が不要になる場合があった。

②食糧の採取　　サルケの採掘跡は子どもたちの遊び場であり、採掘跡に生息するフナやエビ、ナマズなどの採取は遊びを兼ねていた。それらを調理する火はまさにサルケの火であった。

③煙、ニオイ、灰　　サルケの発する強烈な煙が、草屋根や柱の結びナワなどの腐植を防ぐいっぽう、眼病の原因になった。目の病の治癒を祈願する信仰にもつながった。多量の煙は屋内の視界を遮るので、濁酒の摘発を逃れることに利用された。天井や柱についた煤からは膏薬が作られ諸病の治療に用いられた。多量に生じるサルケの灰は山菜のあく抜きや、灰肥、融雪剤に利用された。サルケ独特のニオイが人間関係に影響を与えた。

④ガスと温泉　　泥炭の炭化の進行にともなって発生するガスは、公衆浴場や家庭の燃料として利用された。この地域に点在する温泉の湯には、泥炭層の影響を受けたと思われるもの（モール泉の類）も多く、現在も利用されている。明治時代には津軽地方のサルケから燃料アルコールの精製が試みられた。

⑤青少年の育成　明治期には、青年団によるサルケの共同採掘が、青少年の健全育成に役立てられた。

⑥イメージの活用　　明治期に、サルケにちなむ名物（「さるけ菓子」「泥炭菓子」）が創作され、サルケの名産地としての価値が間接的に利用された。サルケの運搬という日常的イメージを利用して、闇米が運ばれた。

以上のように、サルケはこの地域における生業や衣食住や信仰などと多様なかたちで結びついている。サルケについて知ることは、ひとびとのくらしを知るひとつの手掛かりとなる。視野を拡大して観察したい。[4.(11),(12)]

(6)他地域との比較

県内における庶民の泥炭利用については、本稿で取り上げた集落を含む、津軽地方の西北五（西・北津軽郡、五所川原市および中泊町）地域、すなわち岩木川下流域がよく知られている。しかし筆者の調べにより、下北地方（むつ低地）や上北地方（沼崎低地）においても、サルケ（シギボ）が盛んに利用されていたことがわかった(拙稿2016、2017)。今後は、県外を含めた他地域についても調べを進め、比較検討したい。

謝辞

訪問にあたり、地域にお住まいの多くの方々のご協力を賜りました。貴重なお時間を割いてお話しくださった方々に心から感謝を申し上げます。また、このご縁をきっかけとして、話者の方からサルケの採取に関わる貴重な資料をいただけることになり、筆者を介して青森県立郷土館に寄贈いただきました。厚く御礼を申し上げます。

表５　一覧

No.		集落	性	生年	年齢	来歴	呼称	使用年代	定義/分布/質	入手(採取・譲渡・売買)
1	A	柴田	男	昭和19年（1944）	74	当地で生まれ育つ	サルケ **シバタジャラケ**	昭和30年代なかばころまで	土混じりのもの、植物の根ばかりのものなどさまざま。前者は良くない。	自家用に採取したが、売買したことはない。妻が森田村出身だが、森田ではサルケを買って焚いたと聞く。売り物のサルケは小さかった。
2	B	柴田	男	昭和10年（1935）	83	当地で生まれ育つ	サルケ **シバタジャラケ** ヤシギサルケ	昭和30年代前半には使用	屋敷地内に「ヤシギサルケ」（堅く火持ちが良し）、湿原のものは火持ち悪し。前者が良品。	主として自家用に採取。売買について聞いたことがない。
3	C	柴田	男	大正14年（1925）	93	当地で生まれ育つ	サラケ/サルケ **シバタジャラケ**	昭和30年ころまで	柴田のサルケは優品。サラケには「目」がある。	自分の土地から自家用に採取。柴田から売りに行ったり、他所から買いに来たりした。後者が多かった。
4	D	柴田	男	昭和9年（1934）	84	当地で生まれ育つ	サラケ	昭和19-20年ころまで採取	「本当の元のサルケ」は堅く、沼地のカヤなどの腐った柔かいものと異なる。前者が良品。	自家用に採取した。売買について聞いたことはない。
5	E	柴田	男	昭和9年（1934）	84	当地で生まれ育つ	サルケ	戦後まで	当地のサルケが優品なのは、木の枝が入っておりよく燃えるから。	自家用に採取。某集落の人の所有地を貰う見返りとして、数十年にわたりサルケを提供。他地域へ親戚を通じ譲渡や売買。
6	F	柴田	女	昭和2年（1927）	91	上古川（柏）で生まれ、昭和22年に当地へ嫁ぐ	サルケ/サルコ/サルガ/**シバダのサルケ**	昭和20年代前半には使用	昔はカヤヤヂが広がっており、そこに分布していた。柴田のサルケはよいと評判で、みんな買いに来た。	自家用にサルケを採取した。他村から買いに来た。
7	G	柴田	女	昭和10年（1935）	83	越水（木造）で生まれ、昭和29年に当地へ嫁ぐ	サラケ	昭和30年代はじめまで	斎場方面の田のあたりが昔はヤヂで、そこにあった。	
8	H	柴田	女	昭和25年（1950）	68	岩手県で生まれ、昭和31年に当地へ移住	サラケ/サルケ	昭和30年ころには使用		母方の祖父（明治36年生まれ）が自家用に採取。
9	I	菊川	男	昭和7年（1932）	86	当地で生まれ育つ	サラケ/サルケ	昭和20年代ころまで	田ザラケ：田から採れるサルケ ヤチザラケ：湿地から採れるサルケ 前者が良質で貴重。	自家用に採取することが基本。売買も多少はあった。
10	J	菊川	女	昭和3年（1928）	90	福原（木造）で生まれ、昭和22年に当地へ嫁ぐ	サラケ	昭和22年ころには使用		自家用に採取。
11	K	菊川	男	昭和35（1960）	58	当地で生まれ育つ	サルケ		木造吉見が「サルケ度」が高い。菊川は吉見よりも少ない。吉見の田は「サルケ田」と言われた。	
12	L	丸山	男	昭和13年（1938）	80	当地で生まれ育つ	サラケ	昭和20年代半ばには使用		親戚が丸山へサラケを切りに来た。丸山溜池では池の底に家ごとの権利が設定。
13	M	丸山	女	昭和16年（1941）	77	出精（木造）で生まれ、昭和38年に当地へ嫁ぐ	サラケ	[出精]昭和20年代なかば以降も使用		実家では父親が妹を頼りに出来島へ切りに行った。原野に家ごとの採掘権があった。売買については知らない。
14	N	丸山	女	昭和12年（1937）	81	豊川（稲垣）で生まれ、昭和31年に当地へ嫁ぐ	サラケ	[丸山]他家では昭和30年代に使用 [豊川]昭和10年代後半～20年代前半に使用		
15	O	丸山	女	昭和29年（1954）	64	昭和47年に当地へ嫁ぐ	ー			
16	P	丸山	男	昭和36年（1961）	57	当地で生まれ育つ	サラケ/サルケ	昭和40代前半ころまで	カヤの根のようなもので、軽くて堅いもの。ネッコを切ったものを乾燥させたもの。この周辺は泥炭地である。	ため池から自家用に採取。
17	Q	丸山	女	昭和7年（1932）	86	越水（木造）で生まれ、昭和30年に当地へ嫁ぐ	サラケ	昭和30代前半ころには使用		ため池から自家用に採取。
18	R	丸山	男	昭和9年（1934）	84	当地で生まれ育つ	サルケ	昭和10年代には使用		
19	S	丸山	女	昭和10年（1935）	83	菰槌（木造）で生まれ、昭和30年に当地へ嫁ぐ	サラケ/サルケ	[菰槌]昭和20年代なかばころには使用 [丸山]自家では昭和30年には使用せず		[菰槌]サラケを掘る場所から、自家用に採取。
20	T	丸山	男	昭和11年（1936）	82	横浜（神奈川）で育ち、昭和20年に当地へ	サラケ	昭和30年代前半まで	ヌマ（溜池）にある。 サラケは、タキギの不足を補う燃料である。	ため池のなかに家ごとの権利が設定。譲渡や売買については知らない。
21	U	出来島	男	大正13年（1924）	94	当地で生まれ育つ	サラケ/サルケ	昭和40年代終わりころまで	丸山から出来島に向かう途中にいくつものヌマがあり、そこに分布する。	丸山から出来島に向かう途中にあるヌマから採取。採掘場所に権利。採掘権の売買サラケの採取と販売を生業にする人も。
22	V	出来島	女	昭和8年（1933）	85	芦萢（鰺ヶ沢）で生まれ、昭和28年当地へ嫁ぐ	サラケ	昭和28年に他家では使用、自家は使用せず	何も燃やすものがない人が使うもの。	自家で採取。手伝ったこともある。
23	W	出来島	女	昭和17年（1942）	76	当地で生まれ育つ	サラケ		出来島にはヌマがたくさんあり、そこから豊富に採れる。	出来島のヌマから自家用に採取。
24	X	出来島	女	昭和4年（1929）	89	丸山（木造）で生まれ、昭和21年に当地へ嫁ぐ	サラケ	昭和20年ころまでは使用する家多かった		ヌマ、ため池、カヤヤヂ、田などから自家用に採取。売買については知らない。
25	Y	大畑	女	昭和5年（1930）	88	当地で生まれ育つ	サラケ	昭和20年代には使用		
26	Z	大畑	女	昭和12年（1937）	81	館岡（木造）で生まれ、当地へ嫁ぐ	サラケ		館岡では知らず、大畑に嫁いでからサラケを知った。	

表５（つづき）

No.	目的	採取の時期	採取の場所	採取の主体	採取法	サイズ
1	―	春先3月頃の天気がよい日	馬の草刈り場(柴田の北3km)	父親 自身も手伝い 男性二人一組	表層部を捨て、4-5段掘る。深さは約5尺。長短2種のテンヅキを使用。長いテンヅキは垂直方向、短いものは横方向。フォーク状の道具で取り上げる。整形用にカマを使用。冷水に浸かりながらの作業であるため、体を温めるために酒を飲みつつ行う。	W1尺 H1尺 D5寸
2	燃料		屋敷地のそば、湿地。他家では、田からの例も	男性 20代前半に手伝い 男性二人一組	柄の長いテンズキで垂直に切り込みを3回入れ、柄の短いテンズキで横に切り込む。湿地の水の浮力を利用し3枚まとめた形(立方体)で引き上げる。1枚ずつ引き上げると、形が崩れたり水中に流れるなどのデメリットがある。引き上げ後、カマで整形。	W40cm H40cm D15cm
3	燃料 田地改良	田:4月末の田植え前 ヤヂ:通年	田:屋敷そば ヤヂ:離れた場所	男性(父親) 子どもが補助	表層を1尺5寸除去、田の一辺(10m)の長さで1列に掘る。テンヅギを差し込んで爪先をサラケに差し込みながら手前に引いて切り倒す。下面をカマで整える。田の場合は1段(低くなりすぎないよう)、ヤヂは2段掘り。	W1尺 H1.5尺 D6-7寸
4	―	田:春先 サラケヤヂ:通年	田(自家) サラケヤヂ(他家)	父親 幼少のため手伝わず	田の表土を約3尺除き、表層とあわせて5尺ほどの深さまで掘る。掘ったあとには山から持ってきた赤土や黒土を客土する。続けてその年の稲作をおこなう。	
5	―		ヤヂ(県道186号西側)	父親(明治36生)	前年に切った列に続けて次の列から採る。表土を15-20cmないし20-30cm除去。テンテキで切り取る。水中で切り取ったものは浮かぶ。陸上へ上げて、カマ状の道具で「菓子を切るように」軽量ブロックサイズに切る。	W40cm H30cm D20cm
6	―		カヤヤヂ		四角形に採取。	
7	―		ヤヂ(斎場付近)			
8	―	6月頃から掘った	弥生田、布引方面の湿地 「サラケ専門の場所」	母方の祖父 自身は手伝わず	四角形に採取。	W20cm H20cm 正方形
9	―		ヤヂ(斎場付近) 土地を購入／地主から許可を貰い採取	男性 自身も手伝い	テンズギを垂直に切り込む。幅1尺2寸、深さ2尺4寸、厚さ3寸の直方体に切ったサルケを浮力を利用して引き上げる。タヂのような道具で分割。初めから1尺2寸の深さにしか掘れない(つまり1枚分しか採れない)場所も。ドヅギ(胴長靴)を着用。	W1.2尺 H1.2尺 D3寸
10	―	田起こしよりも前	田		長い棒のついた道具で切った。	W5寸
11	―					
12	―	9月はじめ(溜池の水がなくなる時期)	丸山溜池		柄の付いた平らな道具で切り、深さは約1メートル、3段分を掘った。	W1尺 H1尺 D10cm
13	―		出来島の原野	祖父 自身と家族が手伝い 多くは男性	柄の付いた平らな道具で切り、深さは約1メートル、3段分を掘った。	W1尺 H1尺 D10cm
14	―		[豊川]集落からかなり離れた北方の場所			
15	―	溜池の水が少なくなったころ				
16	―	溜池の水が少なくなり底が出るころ	丸山溜池 丸山周辺のカヤヤヂ			
17	イロリで使うため		丸山溜池	姑・主人 自身は手伝わず	四角形に切ったものであることは覚えている。	四角形
18	―			手伝ったことはない		
19	―		[菰槌]サラケを掘る場所	[菰槌]父親 自身も手伝い	※[右欄は菰槌での事例]	W1尺 H1尺 D10cm
20	―	7-8月、水が少なくなり底が出るころ	丸山溜池 干上がった場所から先に	父親・祖父が中心 自身も手伝い	裸になり、「平べったい刺すような道具」で1尺四方15cmに切って引き上げる。	W1尺 H1尺 D15cm
21	自家消費と販売	7月末-8月にかけて	出来島近辺のヌマ	男性二人一組	ヌマの中にナワを張り、ナワに沿って垂直にテッコダ(テンビンダ)を突き刺す。表土を捨てて、一人目が大きめに切り、あとのもう一人はその塊を3枚程度に切り分けた。一尺を1段として7段採取。	W1尺 H1尺 D15cm
22	―			女性も参加 自身も経験		
23	自分で使うため		出来島のヌマ	父親	ナタを巨大にしたような道具で切る。	
24	―	夏からお盆をまたいで	溜池、ヌマ、カヤヤヂ、田など			
25	燃料がないので	春先 田植え前	田(アラダ)	祖父 自身と祖母が運搬 一家総出	田植え前のアラダで、その年に切るサルケの範囲を定めて採取した。翌年はその続きを掘る。表土を取り除いてサラケを切り、採取後は田が低くなるので、客土する。	W15cm+ H15cm+ D10cm+
26	―					

道具	乾燥	運搬	保管	採暖	炊事
テンズキ（長短2種） サルケ用カマ	1列平置き。ある程度乾燥後、間隔あけて4-5段レンガ積み。頃合いをみて積み替え、乾燥を促す。子どもも手伝う。	レンガ積みの最下段だけ残し荷車に積載。馬に曳かせて自宅へ。残したサルケは、あらためてレンガ積み。	小屋に保管。	ロブヅ（サラケ） ロブヅの中に足を入れる	汁飯：ロブヅ+ナベ（サルケ） 魚：ロブヅ 餅：ロブヅ（灰）
テンズキ（長短2種） サルケ用カマ	①間隔を開けるようにレンガ積み ②ハの字に立てて斜めに次々に立てかけて行く。人により2通りの方法あり	5枚一束。 乾燥後に自宅へ。馬車で運搬。	小屋に保管。	ロブヅ+ツルナベ（サルケ→柴またはワラ束） →レンガカマド+ツバガマ（柴またはワラ束） →S30末：電気釜	
テンズキ サルケ用カマ （中館の鍛冶）	1枚ずつ並べ20日-1ヶ月乾燥。3-5段にレンガ積みし2次乾燥。トータル2-3ヶ月乾燥（1度ひっくり返す）。女性が補助	乾燥後に自宅へ。5枚1束。カナグルマに載せて馬に曳かせる。	畑と屋敷地の境界あたりに積み、ノマをかけて保管。	シボド（サラケ）	シボド（サラケ+補助燃料） 湯沸かし 「飯炊くのでも何でもサラケ」
専用の道具 （名称失念）				シボド（サラケ） ストーブ（サラケ）：S20以降	シボド（ワラ・サラケ） 握り飯をサラケで焼く ストーブ（サラケ？）
テンテキ カマ状の道具 （タヂか）	風通しよく間隔をあけてレンガ積み。頃合いを見て「マギガエシ」（ひっくり返す作業）を行う。乾燥させると小さくなった。	乾燥後に自宅へ。馬に曳かせる。	自宅近くの小屋に保管。	ロブヂ（サラケ）	
	四角形に採って、干した。				
				シボド（サラケ） [越水]シボド（柴）	
わからない	あまり間隔をあけずにレンガ積み。列状というよりも、数列まとめてひとつの塊のように重ねた。	乾燥後に自宅へ。		マキストーブ（マキ）	カマド状の器具+ツバガマ（マキ） →S35頃電気釜
テンズキ タヂ（？）	3～4段にマドヅギレンガ積み。何度もひっくり返す。女性や子どもも手伝う。 「テンキボシ」（天日干し）と称する。	7-8枚1マロで括る。枚数に決まりがある。9月の天気のよい日に運搬。大八車+馬、又はリヤカー+人力で。	シボド（ワラ・サラケ） ※サラケから、サラケ+マキの時代へ。 徐々にマキの度合いが高まる		シボド（サシ・サラケ） ※サシ（稲わらを束ねたもの）
長い棒のついた道具				シボド（サラケ→ 炭、ワッチャギ）→シトブ（アブラ）	シボド（サラケ）
柄の付いた平らな道具	溜池の内側で幾度もひっくり返す。 ハの字に立てかけ、上下を入れ替えながら干す。 「ナマ」では重たいのでよく乾燥させる。	若年層が中心となり乾燥後に自宅へ（溜池は広く家まで距離があるため）。		ロブヂ（サルケ） →S20マキストーブ（サルケ→マキ） [出精村]ストーブ（サルケ）	ロブヂ+カギノハナ+ナベ（サルケ） →S20マキストーブ（サルケ→マキ）
	[豊川]積み重ねて乾燥。			[豊川]イロリ・ストーブ（サラケ） [丸山]ストーブ（マキ）	[丸山]S31-33炉（マキ）→ストーブ（マキ）+ツバガマ→S36電気釜
					※他家ではS31にサラケ使用。その後石炭ストーブや籾殻ストーブ
	小さいころ（S40代）に、切って乾燥させている光景を見た。				
				シボド（サラケ） ストーブ（マキ）	シボド+ナベ（サラケ） [越水]シボド（サラケ）
	[菰槌]ハの字に立てて数日間乾燥、その後積み上げる。くり返しひっくり返す。	[菰槌]乾燥後に自宅へ。		[菰槌]レンガを巡らしたシボド（サルケ） シボドに足を入れ叱責された	[菰槌]レンガ積みカマド（マキ）+ツバガマ シボド（サルケ）+テドリ
平べったい刺すような道具	一枚ずつ平置き。何度もひっくり返す。子どもも手伝う。	ナワで10-15枚ずつ束ねる。数はサラケの厚さにより加減。乾燥後に自宅へ。ショイコで背負い岡づたいに家へ。	小屋に保管。	イロリ（マキ+サラケ）	イロリ+ツルナベ（松や杉の枯れ葉） 保温（サラケ）※姑の役割
ナワ テッコダ （テンピンダ）	陳列は女性。平置き乾燥後、表を内側にハの字形で乾燥。間隔あけ7段レンガ積み。家族主体だが、他家応援も。	馬で1000枚を積載し、配達（販売の際）。		炉（サラケ）→ストーブ（マキ）	炉+ナベ（サラケ）+ナベ 焼き魚
					※その他（風呂の燃料：入らせてもらう代わりにサラケを持参）
	その場で乾燥させる。	乾燥後に自宅へ。運搬作業は自身も手伝った。	自宅に保管。	ロブヂ（サルケ） →石炭 →石油	ロブヂ（不明）→ガス →電気
		乾燥後に自宅へ。	[丸山]他家ではロバタ（サラケ） 自宅では小さなストーブ（サラケ） [出来島]S21ストーブ（マキ：流木）		炊事にサラケを使用せず
何とかガマという厚い刃のカマ	切ったものをあぜに並べて交互に間隔をあけてレンガ積み。自身と祖母の役割。	乾燥後に自宅へ（自身と祖母）。		シボド（サラケ）→ストーブ（石炭→石油）	シボド （カポシ、杉葉、ワラ） →ガス→電気

表５（つづき）

No.	着火・維持・始末	煙・ニオイ・灰	その他
1	マキ1本の上にサルケをのせる。硫黄の付け木で着火。良質なサルケなので、着火は容易。	着火時に煙大量、座敷のハリや柱に黒いスス。高校生のころ白いワイシャツが煙で黄ばむ。ニオイあり、鰺ヶ沢の山村で「お前たちが来るとサルケ臭い」と言われた。	◆切った跡地を「キリパ」という。キリパにはジャコ（小魚）がいたが、骨が硬くて食用に不向きだったので出汁をとるのに用いた。「キリパから獲れる小魚は食えない」（祖母）。大きい魚の場合は焼いて食べた。
2	ロブヅの中に小割りにしたサルケを盛り、中に杉の葉を入れてトツケギで着火。つきやすく、消えにくい。	多量の煙がトラホームの原因に。濁酒の摘発を逃れるため煙で税務署職員を退散。ニオイが染み付く。ニオイを揶揄された話を聞く。灰は融雪に利用。	◆キリッパのフナを焼いたりふなずしにして食べたり、焼干にして出汁をとる。◆キリッパでの釣りや水遊び。◆サルケが地震の揺れを抑える。◆飼っているカモがサルケを巣のかわりにした。
3	ナタで小切り。木片にのせ着火。サラケを足し維持。炊飯はサラケ増量。訪問客にサルケを足してもてなす。	ひどい煙がトラホームの原因に。町の人にサラケ臭いと言われた。町で買い物し、返品を申し出たら「サラケのニオイがついている」と断られた話も。	◆サルケを掘るための口実に、田が高くて湛水しにくいので田を低くしたいと地主に訴えて掘った。◆サラケを切った跡地を「キリッパ」といった。◆サラケには「目」がある。
4	ワラの上に小切りにしたサラケをのせ着火。良いサルケは着火容易。悪いサラケは困難。火持ち悪し。	着火時の煙がひどい。目を悪くする原因になった。土臭いニオイがした。	◆サルケ切りの道具はもったいないが息子が捨てた。 ◆敷地内にサルケを積んだまま現在も保管（朽ちて跡形なし）。当人の心象風景としては積んだままの状態。
5	ナタで小切り。2-3本ほどのマキ（西海岸から行商）の上にサルケを盛り上げて着火。	梅雨入りの頃、天井の煤が黒いしずくとなり落ちてきた。その予防のために茅や藁のコモを天井に張った。	◆5-6年前まで、60年前のサルケを「捨てるに捨てられず」保管。◆今もテンテギを保管。◆サルケを提供するかわりに原野を譲渡する約束が反故にされた。圃場整備後、原野が田に変わったため。
6			◆カヤヤヂは田になり、サルケを長い間見ていない。
7	わずかな木の上にサラケをのせて燃やした。		◆出身地の越水は「山ドゴ」なので柴を焚いた。サラケは当地に嫁いでから初めて用いた。
8	炭のように火をおこして使用。		◆子どもの頃から商売好きで、小学生の時貸本屋を営む。◆岩手から移ったのでサラケを掘る土地や権利がなかった◆サラケ採掘跡は「ソゴナシヌマ」と呼ばれ、子どもたちの遊び場。
9	田ザラケが火力強い。 山盛りにして火力を上げて炊飯。	ヨコザに座る主人の顔が見えないほど煙が充満。北海道に住む姉の夫が訪問時「サルケカマリする」と言った。自分では気がつかなかった。	◆サルケだけを焚いた時代もあったが、マキと併用する度合いが少しずつ高くなっていき、マキのあとはセキユの時代になった。
10		炉で焚いたため、煙が充満した。	
11			
12	サルケの熾にサルケを載せ火を維持。寝る前に灰を被せ朝まで保持。細かく切らずにくべる。		◆掘った跡地をキリパと言った。キリパに落ちておぼれ死ぬところを、近所の女子中学生に助けられた
13		[出精村]煙が目に染みて眠れない。梅雨時には黒い水滴。家の中がまっ黒。着る物全てにニオイが染みつく。	◆丸山溜池へ細い道を下りて、洗濯をした。S38-39頃、洗濯機はなかった。
14			◆集落総出で木伐りをおこなった。各家に分配した。不足分は鰺ヶ沢から購入。 ◆S36当時デンキガマが流行。秋田谷電気商会[木造]から購入。
15			◆サルケについて殆ど知らないという例。S29年生まれの女性。
16			◆キリッパが至るところにあり、魚釣りをした。 ◆出来島の砂を客土した。 ◆20代の息子もサルケについてある程度知っている。
17	マキに火をつけ、その火でサルケに着火。2-3個で一晩持つ。	煙が目に染みた。 独特のニオイがあった。 当たり前なので苦にはならなかった。	◆村人総出でマキを伐り出し、抽選で分配。 ◆丸山溜池で、子どものオシメを洗濯した。
18			◆石油ストーブの時代になって、マキを使用するようになった。 ◆S9年生まれでも、サルケについてほとんど知らないという例。
19	[菰槌]小割りにしてくべる。	[菰槌]煙が多く、目が痛い。メクサレになる人が多かった。ニオイがあるのはどの家も同じで、気にならなかった。	◆[菰槌]足が冷えるので、シボドの中に足を入れると「足ながめで行儀わりい！」と、火箸で父に叩かれた。
20	加熱と保温で燃料の使い分け（前者は松や杉、後者はサラケ）。	煙がひどかった。寝ていると煙が室内にたなびくのが見えた。煙が原因でメクサレが多かった。独特のニオイがあった。	◆マキは春冬に村で伐って分配。◆サラケを切る場所が子どもたちの遊び場。◆海から拾った海藻を布団にした。◆入浴は稀。◆ナベ炊きのご飯のほうが、デンキガマよりも美味しかった。
21	出来島の海岸の流木の上にサラケをのせて着火。S20代終わり頃までは流木を利用。	煙がひどく、目から涙。着火までがひどい。独特のニオイ。サラケ臭いと言われた。灰はワラビのあく抜きに使用。現在もマキストーブの灰を貯めて利用。	◆さまざまな仕事で生計を立てた。出来島海岸の砂利の販売では、午前だけで1人米3俵分を稼ぐ。◆サラケの盗掘あり、上一段分だけを掘る手口。露見した場合は弁償のうえ、再犯しないことを誓わせた。
22			
23		サラケと言えば煙をまず思い出す。	◆出来島では海から砂利を採って商売にした人もいた。◆炊事の設備と燃料については「なんだかんだやった」ので記憶があいまいだと語る。
24	木の上にサラケを小切りにしたものをハの字に立てかけて着火。最初は煙が出るが、炭のようになる。	煙が目に染みた。丸山や出来島の集落に入ると、町から来た人は「サラケくさい」と言った、という話を聞いたことがある。	
25	小割りにしたマキの上に、小割りにしたサラケをのせて着火。	煙のため目が痛くて眠れない。目を悪くする原因。スス臭いニオイ。黒い滴が着物に付着。サラケの灰は捨てた。マキの灰はワラビのあく抜きに使用。	◆カポシと杉の葉は、、山や祖母の出身地（菰槌）から貰った。 ◆面倒に思いながら手伝ったので、逆によく覚えている。 ◆サルケ切りは重労働なので、労働歌を口ずさむような余裕はない。
26		サラケを焚いている家に泊まりに行ったところ、煙のために涙が出て眠れなかった。	◆下通り地域では、軒下に積む薪の蓄えによってその家の経済状況が推察された（「マギまいでれば、そごの家でオガネあるだ」）。

◆マギガエシの作業中、1945年7月28日に青森空襲に向かうB29を見た。◆リヤカーに発動機付きの丸ノコを載せて巡回するマキ切りの行商もいた。◆サルケには「目」がある。目に沿ってナタを入れるときれいに切れるが、横に入れると崩れてしまう。